

## 開校記念日特別寄稿 「デジタルに賭ける思い」

第25代石原小学校長 関根達郎

### 1 はじめに

コロナ禍がようやく終わりが見えてきた。5類になったからである。コロナは未曾有の人災となった。人間があちこち動くことで感染症は広まる。そこで緊急事態宣言を出して、学校を一齐に休校して流行を抑制しようとした。そこで今までなかなか広まらかなったりリモートが広がった。ICTデジタル技術なしには人の流通ができなくなったからだ。学校が一番遅れていて、民間が効率化のためにリモートを使っていてもかたくなに拒んできた。テレビ会議の技術はインターネットができたころからあった。実験的にテレビ会議システムをつかった授業研究もおこなわれた。それでもコロナ禍になるまでには下火になっていた。

コロナ禍のためにやらざるを得なくなった教育界もGIGAスクール構想と相まって一気にリモートが進んだ。それでも、やるべきことを延期したり、中止して何もしなかったりしていた学校もあった。教育界はいったいどれだけ対面にこだわっているのだろうか。あきれてそういったところは放置しておこうと思った。石原小が進化するチャンスである。

### 2 ピンチはチャンス

「ピンチはチャンス」と言われるが、ここまであまり実感がわかなかった。しかしコロナ禍ではチャンス以外になにもものでもない。コロナで何もできない状況を打破するのはICTなのである。コロナ前からzoomは使っていた。通信制の学習のするためにずいぶん重宝した。おかげでコロナがきてもzoomで乗り切ることができるかもしれない。ZoomやICTで学校を変えることができる最後のチャンスと確信したのである。コロナ禍は実に3年におよんだ。しかし3年間はおおきかった。

学校では緊急事態宣言中から積極的に職員のコミュニケーションツールとしてzoomをつかった。職員会議や話し合いはできるのである。子供たちの健康観察もできるのである。何もしない3か月は空白になる。しかし、この3か月こそ蛹の期間。蝶に代わるチャンスなのである。

### 3 一人の10歩より10人の1歩

これは、私の研修の座右の銘である。いくら一人ができていても、ほかの9人ができなければできている一人の自己満足になるか、一人が9人のために働くかどちらかなのである。いずれにしろたとえすこしでも10人ができることで物事が一気に前に進むのである。コロナ禍で職員会議、飲み会をやっていれば苦手な人でもつかえるようになる。Zoom朝会を続けていけば、どんな先生でもトライ&エラーを行い、使えるようになる。子供たちの前で恥をかくことができないからである。どうしてもデジタルができる大人と子供を作りたい。

「デジタルとアナログどちらがよいか？」ではない。デジタルだけできる人は停電時や災害時になにもできない人間になってしまう。当然アナログは大事でももっと大事なことを両

方できることである。そのために手書きかPCかとか 集合かリモートかと論戦している場合ではない。どちらも使えるようになり、自分の意志で選べるのがこれからの時代に必要であると強く考えている。10人が1できればどちらも大事にできるのである。できる一人に頼っていては物事は進まないのである。

#### 4 どうしてもデジタルの良さを教職員に伝えたい。

デジタルに関して子供たちはもうすでに心配はない。デジタルネイティブだからである。しかし、教えなければならない教員ができないと当然ストップをかけるのである。なんの根拠かといえば「自分ができない」から教えられないからである。自分も苦手な音楽の授業はやりたくない。しかし、どうしてもやらなくてはならなければやった。デジタルは音楽に授業より特別ではない。音楽ができなくても死ぬことはないが、これからはデジタルができない人は不幸になる一方で、死んでしまうことがあるかもしれない。デジタルが進み、すべてパソコンでやらなくてはならなくなったら、、、教職員はそうなる前に子供たちに教えなければならない。

苦しいからやらないのである。でも苦しくなってからでは遅いのである。少しハードルが高くてもシステムを変えればやらざるを得なくなる。ほかの人に聞きながらでもやらなくてはならない状況にすることが大切である。その結果 デジタルの良さがわかるのである。デジタルの良さがわかるからその人の生活は楽しくなるのである。

私はスマホを持っていない職員に大きなお世話で、勝手に携帯ショップに頼んであげたことがある。ガラケーだけしか使えない年配の女性の先生は気がついたら使いこなしている。良さがわかったのである。同時にリスクもわかっていた。リスクは必ず存在する。それを知ることが大事なのである。それは子供にとっても大人にとってもである。

#### 5 今こそ ICT テレビ会議

離任式を zoomで行った。そうしたら来ない教員がたくさん出てしまった。本校からはたくさんの先生は「離任式に行きます」と言って職場を離れていくのである。当然本校で職務があっても出張命令をださないということはしない。しかし zoomだとどうか「zoomなんて行かなくてもいいと思った」「zoomなんて 校務優先です」耳を疑った。Zoomは時間の場所を超えるツールのはずなのに、できないことができるツールなのに軽視している教員がまだまだ多いのである。Zoomだと来なくていいと誰がいったのだろうか？zoomだと断る理由がないのではないか？断る人は苦手意識があるか、またコロナ前に戻そうとしている人間である。

こんなに zoomやその他ツールによって人々がコロナ禍でもできていたのに終わったらまた時間とお金の無駄遣いを始めるのかと思うと頭が痛い。コロナが終わった今こそリモートである。テレビ会議システムで遠い向こうの人たちと会える。近くでもよいへたくそな授業をやってるくらいなら上手な隣のクラスのひとが2クラス同時にやるだけで「あ

一面白い わかった」といえる授業があると思う。遠くの人と意見交流して「え？向こうは進んでいる。こっちも負けなぞ！」という気持ちが大切だと思う。それが交流である。こんなに簡単に使える今、情報活用能力と情報モラルを身に付けられるチャンスなのである。

。

## 6 まだまだ重いデジタルのドア

コロナが終わって、すべての場所でコロナ前に戻そうとしている人がいる。しかし今こそデジタルに変えるのである。Zoom で朝会はあたり前になっている。もどしたらどうなるだろう？考えただけでも恐ろしくなる。しかし、手段がないとコロナ前に戻そうとする人によってまたデジタルがすすまなくなってしまう。つまり今こそデジタル化の提案をするときである。のど元過ぎれば熱さ忘れるではない、熱いものが胃の中で胃壁をこうげきするのである。教員生活もあとのこり10か月とちょっとしかない。デジタルで楽しく力の付く授業をこれからの若者と一緒に考えていく。それが教育の神髄だと確信している。

デジタルのドアが重いのはわかっているが、今こそ最後の灯をともしていきたい。それは自分のためではない。これからの人のため、子供たちのためだからである。もう一度石原の地でその良さがわかる授業を実践していきたい。